

デューイに関する「エグジステンス」 研究の検討

中 野 啓 明

An Examination of Studies on “Existence” of John Dewey
by
Hiroaki Nakano

1 教育現象学・実存主義研究の興隆

1950年代から60年代にかけて、教育現象学・実存主義は、アメリカの教育学界で盛んに論議され始めた。初期に刊行された著作は、ネラー（George Kneller）の『実存主義と教育』（1958年）とモリス（Van Cleve Morris）の『教育における実存主義』（1966年）である。⁽¹⁾

このような教育哲学界の動きや、現象学および実存主義が時代の問題を問いぬこうとしていることともあいまって、アメリカ教育哲学会、デューイ学会の機関誌Educational Theory誌には、教育現象学・実存主義に関する研究論文が、多数掲載されてきた。⁽²⁾

こうした動きの中で出版されたものが、D・E・デントンの編著による『教育における実存主義と現象学』と題する論文集である。⁽³⁾この論文集にはAからDまでの四つのアスペクトが含まれているけれども、アメリカの教育思想における実存主義と現象学についての記述があるアスペクトは、アスペクトAのみである。しかも、アスペクトAの中でも、アメリカの教育哲学に大きな影響を及ぼしたジョン・デューイとの関連で実存現象学を論じているのは、ルロイ・F・トルートナーの「ジョン・デューイと実存現象学者」という論文のみである。

先に示した、Educational Theory誌に掲載された11の論文の中にも、ジョン・デューイと実存現象学との関連を述べているものは、見当たらない。

そこで、以下において、このトルートナーの論文における論点の概要を見ることにする。

トルートナーは、この「ジョン・デューイと実存現象学者」（1974年）という論文で、アメリカの教育哲学における中心的存在であるジョン・デューイに関連づけて実存現象学を位置づけている。その際、トルートナーは、実存現象学の立場に立っている。これはトルートナーが教育学と哲学的人間学との結び付きの重要性を自覚しているからである。そして、トルートナーは、両者を対比、分析し、「今なお残っている教育的意味の完全な範囲を理解でき、説明できるためにも、われわれは、デューイの社会的な強調と、実存主義者たちの個人的な強調を含むことが必要なのである。」⁽⁴⁾としている。これは、トルートナーが、教育学と哲学的人間学との結び付きによって、デューイ的パースペクティブと実存的パースペクティブの両方の必要性を認めているところからきている。

トルートナーのいう実存現象学とは、主としてハイデッガーの研究成果に依拠している。

トルートナーは、この実存現象学の研究対象と研究方法を明らかにしている。

① 研究対象は、「生きられる経験」の全体であるとしている。

② 研究方法は、「記述」することにあるとしている。

①についていえば、「生きられる経験」の「世界」もしくは「地平」には、第一に「自己世界」、第二に「共世界」、第三に「環境世界」の三つがあるとしている。

こうした実存現象学の立場に立ちながら、トルートナーは、実存現象学の見解とデューイの見解とを対比して述べている。すなわち、実存現象学では、「前述語的」「前客観的」な世界観をもち、「直接経験」をその哲学的背景とし、「共世界」の概念に基づく「個人的次元」で人間生活の次元を捉えており、「自我の発達における賭けの重要性」を意識しているのである。一方、デューイの哲学では、世界観は「科学的客観的」であり、ダーウィンの影響により「生物学的生活」をその哲学的背景とし、人間生活の次元を「社会的次元」で捉えており、「結果の理知的な探求」を意識しているのである。

トルートナーは、こうしたデューイの見解の背後にある「相互作用 (interaction)」の概念に着目して、次のようにいう。

「デューイのパースペクティブの中軸である、有機体と環境との関係は、初期には相互作用と呼ばれた。実際、後期の著作においてさえ多くの場合、デューイは、なおもこの用語でこの根本的な関係について言及している。しかし、デューイは、『相互作用』があらかじめ分離していた二つの実体を結び付けているということを示唆するために、また、有機体と環境との関係それ自体が所与のものであることを示しているという観念を伝えたいために、彼は後に、『相関作用 (transaction)』という用語を好んでいたのである。しかし、『相互作用』であれ『相関作用』であれ、いずれもにせよ、デューイの基本となる定式の二つの構成要素は、有機体と環境なのである。」⁽⁵⁾

トルートナーは、ここで、デューイにおける「相互作用」の概念も「相関作用」の概念も、「いずれにせよ、デューイの基本となる定式の二つの構成要素は、有機体と環境なのである」として、「相互作用」「相関作用」の両概念を同一視している。

わたしは、トルートナーが、ハイデッガーの図式である「関心」とデューイの図式である「相互作用」を対照させて、両者の対話を試みている点を評価する。しかし、トルートナーは、デューイの後期の研究成果である「相関作用」を位置づけることができていない。つまり、「相互作用」と「相関作用」とを対比し、両者の相違点を取り出すことができていないのである。この「相関作用」を位置づけるならば、両者の対話は、さらに進んだであろう。

なお、トルートナーのこの論文は、デューイ的パースペクティブと、実存的パースペクティブの両方の必要性を強調しているけれども、また、「生きられた経験」も強調しているけれども、わたしの研究の関心であるジョン・デューイにおける「エグジステンス」の問題を、自覚的に取り上げていない。というのは、トルートナーによるハイデッガーの図式も、トルートナーによるデューイの図式も、認識論的観点に収斂していく方向をもっているものであり、形而上学や存在論の方向が弱いからである。デューイにおける存在論を捉えるためには、「有機体」、「環境」、そして「周囲にあるもの」(surroundings)の関係を捉えることが必要である。たしかに、トルートナーは、「自己世界」「共世界」「環境世界」をハイデッガーとの関係で位置づけているが、デューイ哲学との関係では位置づけていないといってよい。もっとも、トルートナーが、デューイ哲学における「エグジステンス」を明確に位置づけることに成功していないからといって、これは、トルートナーに責任を帰すこともできない。これは、アメリカにおけるデューイ研究において、デューイの「エグジステンス」研究の成果の蓄積が少ないことに理由があるのである。

以上、主としてアメリカの教育哲学界における実存現象学の興隆を見てきた。その際、アメリ

カ教育哲学に大きな影響を及ぼしたデューイとの関わりで実存現象学の研究を勧めていくことが、現在の課題であることを述べた。

では、日本の教育哲学界においては、また、日本におけるデューイ研究においては、この課題がどのように受けとめられているのであろうか。そこで、本稿ではこの課題に対する先行研究の到達点を見ていくことにする。しかし、デューイ研究は広範囲に及んでいるので、ここでは、さらに、デューイにおける「エグジステンス」との関わりで、かつ実存現象学を論じている研究に限定して先行研究の位置づけを行うことにする。なお、先行研究の文献を検索するにあたっては、日本デューイ学会の機関誌である『日本デューイ学会紀要』で、論文題目と、各年度の学会発表題目を調べた。調査して気づいたことであるが、デューイにおける「エグジステンス」研究に関する論文、デューイにおける「エグジステンス」との関わりで実存現象学を論じている論文は、⁽⁶⁾きわめて少ない。『日本デューイ学会紀要』に掲載されている先行研究論文は、次の三つである。

- ① 山田英世「デューイにおける人間存在の形而上学」（1973年）。
- ② 甲斐進一「デューイ哲学におけるエグジステンス（existence）の問題（特に宗教論について）」（1973年）。
- ③ 峰島旭雄「デューイ哲学におけるエグジステンスの問題（特に実存主義との対比において）」（1973年）。

この三論文は、前年度の日本デューイ学会課題研究における口頭発表をもとにした論文である。

そこで、ここでは、日本におけるデューイの「エグジステンス」概念に関する先行研究の到達点を見ていくために、これらの三つの論文を、以下において位置づける。

2 デューイの形而上学における実存的カテゴリー

山田英世は、『J. デューイ』⁽⁷⁾（1966年）、『明治プラグマティズムとジョン＝デューイ』（1983年）を著している。山田のデューイ研究で、デューイと形而上学を扱ったものは、「デューイにおける人間存在の形而上学」と題する論文のみである。山田は、この論文で、人間存在の観点からデューイの形而上学を新たに解釈し直そうとしている。山田は、この論文における問題意識が次の二点にあるという。

一つは、「自然主義的ヒューマニズム」であるデューイ哲学の「ヒューマニズム」に力点を置き、人間の側からの自然および超越者の解釈をするということ、今までのデューイ研究者は見落していることである。二つは、「自然的存在」「歴史・社会的存在」「形而上学的存在」の三つの様態からいっさいの存在を見ることで、デューイを「新しい形而上学者」として捉えなおす必要があるということである。

この二つの問題意識から、山田は、デューイの「存在一般に関する理論、とくに人間存在に関する基礎理論を、かれの形而上学に関する主著である『経験と自然』をテキストとして、検証しよう⁽⁹⁾」としている。

その際、山田は、まず、デューイの「エグジステンス」に関する用語法を調べている。その結果、デューイの「用語法は、まったく、日常的・常識的である。そして、その『存在』には、実存哲学のいわゆる『実存』の意味をふくめていながら、とくにそのニュアンスを実存哲学者のように、とりたてて強調することはしない。」⁽¹⁰⁾という。しかし、山田は、このようにデューイの用語法を調べておきながら、これを「外面的な考察にすぎない」⁽¹¹⁾とみなして、正當に評価していない。わたくしからすれば、山田は、用語法の中にあらわれているデューイの「エグジステンス」に関する概念をデューイに即して分析するまでには至っていないのである。

一方、山田は、デューイにおいては、「場」において生起する「どのように」⁽¹²⁾という問いと「何」⁽¹³⁾という問いそのものがすでに一つの経験であり、存在であるとしている。その際、山田は、第一に、「デューイにおいては、『人間』と『経験』とは同義語⁽¹⁴⁾であり、しかもその「人間の経験は、先天的に、人間をとりまく客体物に対して志向性をもつ。」⁽¹⁵⁾として、「インターアクション」や「場」、なかでも「トランスアクション」に注目している。⁽¹⁶⁾第二に、山田は、デューイにおける「賭」すなわち「投企」としての「実験」の意味にも注目している。⁽¹⁷⁾こうして山田は、「トランスアクション」を、「限界状況を突破し、越えて（トランス）ゆく行為（アクション）こそがトランスアクションにほかならない」と解釈している。⁽¹⁸⁾すなわち、デューイにおける「人間は、社会的存在として、世界内存在なので」⁽¹⁹⁾あり、実存主義的な人間把握をしていると、山田は捉えているのである。

しかしながら、山田は、「デューイの場合、ヤスパースにおけるがごとく、限界状況の実存主義的自覚があったとはいえないであろう。デューイは、ハイデッガーのいわゆるダス・マンがおちいつている日常的な場を、ハイデッガーとは逆に、むしろ、人間存在にとっての本来的な場として記述しているのである。」⁽²⁰⁾として、相違点も明らかにしている。

さらに、山田は、デューイの「第一次的経験」「粗経験」「直接経験」にも、「存在」の観点から注目している。すなわち、山田は、「経験そのものもまた存在なのであるから、経験による存在把握は、存在みずからの自己把握にほかならない。したがって、みぎにあげた諸経験は、いわば、主客未分の状態にある。」⁽²¹⁾として、「デューイにおいては、個々の存在が、素朴實在論的な意味において、普遍の本質に先き立つ。」と結論づけている。ここには、「実存は本質に先立つ」というサルトルの見解の影響が多分に見受けられる。つまり、山田は、実存主義の見解を自分自身のデューイ解釈の基盤としていと考えられる。

以上のことから、山田は、「デューイにおける人間存在の形而上学」についての考察結果を、次のようにいう。

「実験には、みとおしのきく合理的部分と、みとおしのきかない非合理的部分とがふくまれているはずであって、後者を欠く試みの行為は、けっして実験とはよばれない。デューイの『経験と自然』は、このような意味での実験としての経験を人間存在の本来的なあり方としてとらえ、それを、一方の極においては自然と、そして他方の極においては価値と、連接せしめながら、その連続の過程における人間存在の実存的属性を解明しようとしたものにほかならない。デューイは、実験の主体に、いわば、実存としての人間存在を想定したのである。」⁽²²⁾

要するに、山田は、この「デューイにおける人間存在の形而上学」という論文において、ジョン・デューイにおける「実存としての人間存在」を、実存主義的な観点をういながら、形而上学としての存在論の中に位置づけたのである。

3 デューイの「エグジステンス」についての二つの論文

山田の論文に続いて、甲斐進一の「デューイ哲学におけるエクジステンス（existence）の問題（特に宗教論について）」という論文と、峰島旭雄の「デューイ哲学におけるエグジステンスの問題（特に実存主義との対比において）」という論文を検討する。両者の論文は、「エグジステンス」の問題を論じている点で、共通している。しかしながら、甲斐が「宗教論」の観点から、峰島が「実存主義との対比」の観点から論じている点で、両者は異なった論究をしている。では、以下において、両者の論究の具体的内実を、甲斐、峰島の順に見ていくことにする。

なお、甲斐はその論文の題名からもわかるように、existenceを「エクジステンス」と訳して

いるが、本稿においては、甲斐の引用文以外の地の文では「エグジステンス」という表記を統一して使うことにする。

甲斐は、デューイにおける「エグジステンス」という語が「人間存在」のみではなく、「自然存在」をも意味しているという。⁽²³⁾その上で、この「デューイ哲学におけるエグジステンス(existence)の問題(特に宗教論について)」という論文で論究する範囲を「人間存在」に限定している。そして、この「人間存在」の問題をデューイの宗教論の観点から論じようとしている。というのは、宗教論の問題は、「かれの哲学の立場である自然主義的信仰が明確にうち出されている」⁽²⁴⁾ものであり、「人間観や世界観を総合した意味での人間存在の問題」⁽²⁵⁾がそこにはあらわれているからである。その際に甲斐が検討の対象としているデューイの文献は、『共通の信仰(A Common Faith)』(1934年)であるが、補助的に『経験と自然』(1929年)をも検討の範囲に入れている。この点で、山田英世が『経験と自然』をデューイの主たる文献としていたこととは異なる。

甲斐は、まず、宗教との関わりで人間の状況について述べている。宗教は、その原初的な意味において、人間の恐怖というものに関わっている。甲斐は、この恐怖というものが「デューイにとっては紛れもなく環境の機能であり、働きかけの結果」⁽²⁶⁾生ずるものであるとしている。つまり、甲斐は、デューイにとっての宗教が「環境」の働きかけによって生ずる人間の状況と捉えられているとしているのである。

しかしながら、人間は、宗教論から見ても、ただ「環境」から働きかけられているだけではない。「環境」に働きかけている面も持っているのである。甲斐は、デューイにおけるこの点を「人間の行為・態度」として、「適応(adjustment)と適応以上の態度」⁽²⁷⁾に分類している。前者は、さらに「適合(accomodation)」^(ママ)と調整(adaptation)に分類される。⁽²⁸⁾しかし、デューイにおける宗教的態度とは、このような「適合」や「調整」ではないのである。デューイにおける宗教的態度とは、「適合」よりも能動的で、「調整」よりも積極的な、「人間としての自分の全体」⁽²⁹⁾もしくは「人間の有機的な総合体としての、全体としての意志の変化」⁽³⁰⁾に関わるものである。

また、甲斐は、この宗教的態度もしくは行為が生起するための必要条件として、デューイが「決して超自然的なものではなくて、むしろそれから決別した理想目的実現のための努力」⁽³¹⁾を挙げているとしている。ここでいう「理想目的」についていえば、甲斐は、デューイがこの「理想目的」実現のための現実との融合の働きを「神」と呼ぼうとしているという。これは、一見、「超自然的」な、先験的な媒介物としての存在者を、デューイが想定しているように見えるかもしれない。しかし、「デューイの場合、個別性、孤立性、ディスコミュニケーションの事実を認めながらも、最終的には、コミュニケーションの可能性を確信している」⁽³²⁾のである。したがって、「超自然観と結びついた宗教観からの脱却が、デューイの宗教観、人間存在観、社会観の基本前提になっている」⁽³⁴⁾のである。つまり、「デューイは、自然や社会と連続したものとして人間存在」⁽³⁵⁾を考えていると、甲斐はみなすのである。

この「自然や社会と連続したものとして人間存在」というデューイの捉え方を、甲斐は、その考察の中で次のようにいう。

「人間を自然や社会との連続性の中でとらえる見方は、経験する人間を、生活体と環境とのトランスアクションの角度から把握する立場である。これはハイデッガーのいう世界内存在としての現存在の把握と共通する面が感じられる。これについては、最近トルートナーやケシュテンバウムも注目している。」⁽³⁶⁾

甲斐は、デューイの自然や社会との関わりの中での人間存在の位置づけ方が、ハイデッガーの

世界内存在としての現存在の位置づけ方と「共通」していると指摘しているのである。甲斐は、「経験主義哲学——デューイを中心として——」という論文⁽³⁷⁾においても、デューイとハイデッガー両者の共通点と相違点を指摘してはいる。しかし、それがデューイのどの文献のどの言葉から、なぜそういえるのかを具体的に論証してから指摘しているわけではない。それゆえ、甲斐によるハイデッガーとの比較を通した上でのデューイのトランスアクション概念に関する指摘は、論証という点から見ると、不十分なものであるといえる。

この種の考察に基づいて、甲斐は、デューイにおける宗教的態度の特色をまとめているので、次に示す。

「人間の有限性を否定していないが、悲観的、宿命論的な見解には留まらないということである。換言すれば、人間は、人間の力を越えた諸々の力に包囲され、人間の運命が不安定なものであるという自覚はしているが、人間の可能性を信頼している。人間がおかれている状況がどのようなであろうとも、人間の想像力と知性の駆使によって、その状況の望ましい改善の可能性へ接近できるものとしている。したがって社会悪の原因を、人間の道徳的頹廃（特に本能的原因⁽³⁸⁾）とすることには満足しない。人間性も絶えず改善の可能性があると考えているからである。」

つまり、甲斐は、宗教論から見た場合のデューイ哲学における「エグジステンス」の問題を、知性を育成する教育的認識論の問題として捉えているのである。宗教論もたしかに認識論の問題を含むけれども、わたしは、宗教論からすれば、まず何よりも存在論の問題を考察する必要があると考える。

他方、峰島旭雄は、「デューイ哲学におけるエグジステンスの問題（特に実存主義との対比において）⁽³⁹⁾」においてジョン・デューイと実存主義とにおける existence 概念を、七つの視点からの対比を行っている。七つの視点とは、すなわち、「実存と本質」「自由と主体性」「連続と非連続」「単独性と社会性」「interestとhabit」「世界内行為存在」「限界状況」である。

ところで峰島は、この七つの視点からの対比を行うのに先立って、デューイにおけるexistenceの概念を、『経験と自然』を中心としてデューイに即して分析している。その結果を、峰島は、「existenceには、(1)ただ『存在する』『ある』というふつうの意味をあらわすだけの場合（たとえばthe existence of value）、(2)『存在するもの』『存在者』という一般的な意味をあらわす場合（たとえば形而上学を規定して『存在者の一般的特性の認識』cognizance of the generic traits of existenceという場合）、(3)本質（essence）との対比においていう場合、などがある、ということができる。」と述べている。そして、峰島は、(3)の「本質との対比においていう場合」を特に取り上げ、次のようにいう。

「existenceは、……（中略・引用者）……あくまで直接的・独自のであるのにたいして、essenceは、existenceのうちに含蓄されている意味を引き出して、転移・通約可能なものたらしめたものであるということができよう。ここで注目すべき点は、essenceなるものが、ふつう考えられるように、抽象化ではなくて、かえって、相互作用のうちに成行を見ていくところに得られるということである。また、existenceがいわば『先なるもの』であるのにたいして、essenceは『あとなるもの』であるということも、見のがしてはならない。

『経験と自然』において用いられているexistenceの語は、まずもって、右のような直接的・独自のものを示していると考えてよからう。⁽⁴¹⁾」

峰島は、デューイの用語法におけるexistence概念の特色が、

- ① essenceは、existenceのうちに含まれている。したがって、essenceは、existenceの「意味を引き出し」、「転移・通約」するものであるといえる。
- ② essenceは、「抽象化」の結果得られるのではなく、「相互作用」という具体的な関わり

の中において得られる。

③ existenceは、essenceよりも先立つものである。

という三点にあるとしているのである。

以上の分析を行った上で、峰島は、デューイにおけるexistenceの概念と実存主義・実存哲学におけるexistenceの概念との対比を七つの視点から行っている。以下において、峰島の挙げた七つの視点から見た場合、共通点と相違点が何になるのかということに焦点を当てながら、七つの視点順に見ていくことにする。

第一の「実存と本質」に関わっての共通点として、峰島は、「サルトルが『実存主義はヒューマニズムである』の中で、実存主義の諸類型——有神論的であれ無神論的であれ——に共通な基本的テーゼは『実存が本質に先立つ』であるといっていることは、あまりにも有名であるが、これをそのまま『existenceがessenceに先立つ』というようにしてみると、existenceが『先なるもの』でありessenceが『あととなるもの』であるとしたデューイの立場と、一応、おなじ方向にあるといえよう。」⁽⁴²⁾ということを挙げる。峰島は、existenceがessenceに先立っているという意味において、デューイと実存主義・実存哲学（少なくともサルトルの哲学においては）との間には共通点がある、としているのである。つまり、existenceとessenceはどちらが先かという問いの下では、デューイと実存主義・実存哲学とは、共にexistenceが先であると答えるのである。

しかし、この点が相違点ともなると、峰島はいう。「サルトルのテーゼにおいては、『実存が本質に先立つ』という『先立たれた本質』が『あとから』語られてくるということは、じつはないのである。サルトル自身、言葉をかえていっているように、それは『主体性のみあり』ということの意味している。それは、いま・ここに、すなわち状況の中に投げこまれている人間実存が自由に選択・決断・行為することにはほかならない。そのような実存のみありということになれば、その基本的な発想がデューイの哲学思想と異なることは、明らかである。」⁽⁴³⁾峰島は、ここで、デューイと実存主義・実存哲学とでは「実存」するのは誰かという問いを設定した場合に相違点が生ずる、としているのである。すなわち、実存主義・実存哲学はこの問いに対して「主体性」と答えるが、デューイはこの問いには答えない、としているのである。いいかえれば、実存主義・実存哲学は主体に重点を置くが、デューイにおいては主体としての「有機体」と「環境」の双方とも重視しているのである。

第二の「自由と主体性」に関わっての共通点としては、デューイも実存主義・実存哲学も「自由」という表現を用いているということが挙げられる。

しかし、峰島は、共通点よりも、相違点の方を強調している。すなわち、峰島は、デューイにおいては「自由の名称のもとに人格の自由、倫理学上で自由と義務といわれる場合の自由について思索していた」⁽⁴⁴⁾けれども、「1890年代」「以後こんにちにいたるまで、デューイにおいては、政治的・経済的ないみでの自由の問題、すなわち社会的統制の問題がかれの関心をひき、主体的な自由への論及は見出されえない。」⁽⁴⁵⁾という。つまり、デューイは、freedomとlibertyの内、「政治的・経済的ないみでの自由」としてのlibertyを重視しているのである。こうしたデューイの見解に対し、「実存主義における自由とは、まずもって主体的な自由のことである。」と、峰島はいう。峰島によれば、この見解は、サルトルの場合特に当てはまる。なぜなら、サルトルのいう選択・決断・行為というものは、その軸にこうした哲学的・根源的な自由があるからである。つまり、デューイは「政治的・経済的」な自由を、実存主義・実存哲学は「主体的」な自由を強調しているのである。

第三の「連続と非連続」に関わっては、まず、相違点から述べる。峰島は、「デューイが生活体と環境との相互作用を通じての経験の連続的な成長を説いたことは、あまねく認められるとこ

ろである。」⁽⁴⁷⁾といい、デューイが「連続」的な成長を強調しているとしている。一方、実存主義・実存哲学の場合は、どうであろうか。峰島はいう。

「実存主義においては、ハイデッガーの被投的企投性によく示されているように、人間実存は過去の事実性を背負って、いま・ここに投げ出されておりながら、すでに述べたような自由と主体性によって、かかる規定を規定しかえして、未来へ向かって選択・決断・行為していくことができるとされている。かかる営みは、すでにあるところの自己を脱却していくみにおいて否定を含み、超越という語をもってもあらわされる（たとえばサルトル）。キルケゴールはこのおなじことを反復の語をもつていいあらわしている。……（中略・引用者）……反復とは結局のところ、人間が単独者として神のまえに不義なるものとしてしか立たしめられず、そのような（絶対）否定を介してよみがえることを意味する。そこには否定を介しての質的な転換、ひとたびの断絶を通しての肯定がある。」⁽⁴⁸⁾

つまり、峰島は、実存主義・実存哲学が「連続的な成長」を強調するデューイとは違って、「非連続」的な「超越」ともいえることを強調している、としているのである。

しかしながら、峰島は、デューイにおいても「相互作用に一種の否定を介して飛躍をもたらすものとして、suggestionとimaginationの役割が大であることが、指摘されている。」⁽⁴⁹⁾として、デューイと実存主義・実存哲学との間には「否定を介して」の「飛躍」という共通点があるとする学説を紹介している。だが、峰島自身は、suggestionもimaginationも「やはり一つの連続的な成長の一齣ではなかろうか。」⁽⁵⁰⁾として、「デューイの立場はあくまで非連続の連続であり、実存主義の立場は非連続の連続である」⁽⁵¹⁾ということを強調している。

第四の「単独性と社会性」に関しての両者の共通点としては、両者とも「コミュニケーション」や「交わり」といった他との関わりを重視していることが挙げられる。

しかし、峰島は、どの部分における関わりであるのかという点で、両者には相違点が出てくる、としている。すなわち、実存主義・実存哲学における「『交わり』は実存という絶対的意識の深みにおける交わりなのである。」⁽⁵²⁾一方、「デューイのコミュニケーションは、生物的な生活体と環境との交渉を基底にもつところの社会的関係、市民的自由にもとづくところの交わり」⁽⁵³⁾なのである。

第五の「interestとhabit」に関していえば、両者ともinterestもhabitも取り挙げてはいる。

しかし、峰島は、interestもhabitもデューイと実存主義・実存哲学の間では意味が異なっている、としている。

まず、峰島は、interestについて、デューイにおいては「生活体と環境との相互作用は人間存在のinter-esse的なあり方を示しているのであるが、その場合、やはり、生活体と環境とが相互肯定的にかかわりあい（conflictはあるとしても）、その成行は連続的に進展していくものと考えられる。」⁽⁵⁴⁾としている。このデューイの見解に対して、実存主義・実存哲学者としてのキルケゴールにおいては「関心性は否定性でも。……（中略・引用者）……キルケゴールのいおうとするのは、要するにinter-esseは否定・分離を介しての無限の情熱の醸成^{（55）}ということであり、神への実存のかかわりあいということである。そこには、すでに触れた非連続の連続がある。」という。つまり、峰島は、interestに関してデューイが「肯定的」「連続的」に進展していくとしているのに対し、実存主義・実存哲学が「否定的」「非連続的」に進展していくとしていると述べているのである。

また、峰島は、habitを、デューイにおいては「一般に考えられるごとき一種の墮性としての習慣ではなくて、自我を組織づけ、社会的機能としても働くところの、能動的な経験のエレメント⁽⁵⁶⁾」と捉えている、としている。一方、キルケゴールにおいては「真摯^{（エルンスト）}なるものをもって心の高次

にして最深の表現とし、それは神へのかかわりにおける至福の享受に裏づけられているとしているが、このような根源性が欠落するとき、そこに反復（超越）ではなく習慣が生ずる⁽⁵⁷⁾としている。つまり、デューイはhabitを能動的・積極的な意味で用いており、実存主義・実存哲学は受動的・消極的な意味でhabitを用いているのである。これが「両者の思想の基本構造における相違にもとづくことは、明らかである。」⁽⁵⁸⁾

第六の「世界内行為存在」に関する共通点としては、峰島の「人間は必然的に世界の内において行為する」というデューイ解釈⁽⁵⁹⁾からくるところの、ハイデッガーの「世界内存在」という図式との類似性が挙げられる。

しかしながら、峰島は、相違点を強調して、次のようにいう。「デューイによれば、世界内で行為する人間は、自然の一部として、他の部分へ自己を適応させなければならない。つまり、あくまでデューイの自然主義や適応原理に支えられて、世界内行為存在がいわれるのである。これにたいして、ハイデッガーのいう世界内存在といえば、事物のような眼前存在やその他の道具存在は真の意味での世界内存在ではなく、人間が本来的なあり方への傾斜をもつことにおいて不安や憂慮を通して世界のうちに自己自身を見出すことであるから、自然主義的な適応原理はしりぞけられ、『死への存在』⁽⁶⁰⁾というような自覚によって否定転換せしめられた人間存在のあり方ということになるのである。」つまり、峰島は、デューイにおける「世界内存在」は「自然主義や適応原理」に拠っているのに対し、ハイデッガーにおける「世界内存在」は「自然主義や適応原理」に拠ってはいない、としているのである。

第七の「限界状況」に関して、峰島は、「死はデューイも状況のうちに数えあげているものであるが、それは、もろもろの状況エレメントのうちの一つであって、ヤスパーズのように、それなくしては人間の基本的あり方が解体するようなものとしては、考えていないかのごとくである。ましてハイデッガーのように、人間実存すなわち『死への存在』というまでには捉えていないものとおもわれる。」⁽⁶¹⁾という。つまり、デューイの方は、「死」という状況を積極的には位置づけていないことに、実存主義・実存哲学との相違点があるとしているのである。

こうして、峰島は、デューイ哲学と実存主義・実存哲学との相違点を認めながらも、次のように論をまとめている。

「両者とも、真摯な人間追究であるかぎりにおいて、そのような基本的立場の相違にもかかわらず、かなり、あるいはほとんど、接近して、人間実存のいくつかの側面をとらえており、もし、ほぼ確立している実存哲学ないし実存主義の立場に拘泥せず、端的に『人間実存とはなにか』を追究する場合、デューイ哲学のうちにいわゆる実存的なものをよみとりうる可能性は、認められるであろう。それはまた、デューイ哲学に新しい光をあてて、そこに埋れている可能性を発掘することにもなるであろう。」⁽⁶²⁾

デューイ哲学と実存主義・実存哲学とは、立場の相違を越え、「人間実存とはなにか」ということを追究している点において類似点があると、峰島は両哲学の対比の結果、結論づけているのである。

4 三研究の研究対象と研究方法

以上、日本デューイ学会における現段階でのデューイにおける「エグジステンツ」に関する先行研究について述べ、かつデューイにおける「エグジステンツ」との関わりで実存現象学を論じている先行研究の到達点を述べてきた。

これらの研究は、峰島がいうように、「デューイ哲学に新しい光をあてる」ことにもなるもの

である。つまり、これらの研究は、いままでのデューイ研究においては光があててこられなかった研究対象なのであり、未開拓であるといつてよい。日本デューイ学会においては、先に挙げた三つの論文しかないのである。これら三つの論文名を、いま一度示し、研究対象と研究方法の観点から整理してみる。

- ① 山田英世「デューイにおける人間存在の形而上学」(1973年)
- ② 甲斐進一「デューイ哲学におけるエグジステンス (existence) の問題 (特に宗教論について)」(1973年)
- ③ 峰島旭雄「デューイ哲学におけるエグジステンスの問題 (特に実存主義との対比において)」(1973年)

まず、①の論文の研究対象と研究方法をまとめる。山田の研究対象は、デューイにおける「存在一般に関する理論、とくに人間存在に関する基礎理論」⁽⁶³⁾にある。いいかえるならば、山田の研究対象は、「デューイにおける人間存在の形而上学」にある。また、山田の研究方法は、デューイの「形而上学に関する主著である『経験と自然』をテキストとして検証」⁽⁶⁴⁾するというものである。これをより具体的にいうならば、わたしが本稿第二節「デューイの形而上学における実存のカテゴリー」において明らかにしたように、「外面的」にはデューイの「エグジステンス」に関する用語法を「検証」し、内面的には実存主義的な観点をを用いてデューイの『経験と自然』を「検証」していくというものである。

次に、②の論文の研究対象と研究方法についてまとめる。甲斐の研究対象は、デューイ哲学における「エグジステンス」にある。また、研究方法は、宗教論の観点からデューイ教育哲学と実存主義との比較をしていくというものである。

さらに、③の論文の研究対象と研究方法についてもまとめる。峰島の研究対象も、甲斐論文と同じく、デューイ哲学における「エグジステンス」である。しかし、研究方法は、甲斐論文とは違って、実存主義の観点から対比するというものである。

このように、三つの論文は、デューイにおける「エグジステンス」の概念を研究対象としているという点で共通している。そして、研究方法も、実存主義の観点をを用いているという点では共通している。また、デューイの『経験と自然』を主要なテキストとしている点でも共通している。

しかし、三つの論文とも、デューイの記述に即して、デューイの立場から実存主義的観点があるのか、現象学的要素があるのかを捉え返すことはしていない。つまり、デューイにおける「エグジステンス」概念を研究対象とする際に、デューイの『経験と自然』に即しながら、デューイの立場に立ってデューイにとっての実存主義、および現象学の問題を研究することは、従来の研究では行なわれていないのである。

さらに、三論文とも、デューイにおける「エグジステンス」概念に関して、人間存在の側面のみを取り立てて強調している。換言すれば、三論文とも、デューイにおける「エグジステンス」の概念を、デューイの「経験」および「経験的方法」の概念と「自然」概念との関わりの中で考察していくことはしていない。わたしは、こうした考察の仕方によって、デューイにおける「エグジステンス」の新しい研究成果が生み出されると考えている。⁽⁶⁵⁾

註

(1) G. Kneller, *Existentialism and Education* (John Wiley & Sons, 1958).

V. C. Morris, *Existentialism in Education* (Harper & Row, 1966).

(2) たとえば、次の一連の諸論文が挙げられる。

Arthur G. Wirth, "Viktor E. Frankl and 'The Responsible Self'", *Educational Theory*,

XII (October, 1962), pp.241-246.

Kenneth Winetroun, "Buber: Philosopher of the I-Thou Dialogue", Educational Theory, XIII (January, 1963), pp.53-57.

David E. Denton, "Albert Camus: Philosopher of Moral Concern", Educational Theory, XIV (April, 1964), pp.99-102.

Donald Vandenberg, "Kneller, Heidegger, and Death", Educational Theory, XV (July, 1965), pp.217-221.

Anthony E. DeSoto, "Heidegger, Kneller, and Vandenberg", Educational Theory, XVI (July, 1966), pp.239-241.

Samuel Tenenbaum, "Implicaions of a Phenomenological Approach to Education", Educational Theory, Vol.17 No.4 (October, 1967), pp.343-352.

Haim Gordon, "Would Martin Buber Endorse the Buber Model?", Educational Theory, Vol.23 No.3 (Summer, 1973), pp.215-223.

Thomas Oliver, "Camus, Man, and Education", Educational Theory, Vol.23 No.3 (Summer, 1973), pp.224-229.

Khemais Benhamida, "Sartre's Existentialism and Education: The Missing Foundations of Human Relationships", Educational Theory, Vol.23 No.3 (Summer, 1973), pp. 230-239.

J. Richard Wingerter, "Pseudo-Existential Writings in Education", Educational Theory, Vol.23 No.3 (Summer, 1973), pp.240-259.

Russell Dennis, "Phenomenology: Philosophy, Psycholgy and Education" Educational Theory, Vol.24 No.2 (Spring, 1974), pp.142-154.

(3) David E. Denton (ed.), Existentialism and Phenomenology in Education (Teachers College Press, 1974).

D・E・デントン編、菊地陽次郎・山根耕平・林泰成・堤正史・中川吉晴訳 『教育における実存主義と現象学』（晃洋書房、1987年）。

本書の章構成は、原文では次のようになる。

Aspect A

1. David E. Denton, "The Terrane"
2. Leroy F. Troutner, "John Dewey and the Existential Phenomenologist"

Aspect B

3. Eugene F. Kaelin. "The Existential Ground for Aesthetic Education"
4. Maxine Greene, "Literature, Existentialism, and Education"
5. Philip N. Phenix, "Unamuno on Love and Pedagogy"
6. David E. Denton, "That Mode of Being Called Teaching"

Aspect C

7. J. Gordon Chamberlin, "Phenomenological Methodology and Understanding Education"
8. Clinton Collins, "The Multiple Realities of Schooling"

Aspect D

9. Leroy Troutner, "Time and Education"
10. Donald Vandenberg, "Phenomenology and Educational Research"

(4) Leroy F. Troutner, "John Dewey and the Existential Phenomenologist", in David E.

Denton (ed.), *Existentialism and Phenomenology in Education* (Teachers College Press, 1974), p.41.

ルロイ・F・トルートナー「ジョン・デューイと実存現象学者」〔D・E・デントン編、菊地陽次郎・山根耕平・林泰成・堤正史・中川吉晴訳『教育における実存主義と現象学』（晃洋書房、1989年）〕、56ページ。

- (5) Leroy F. Troutner, *ibid.*, p.17. 引用文中に二重カギは、原文ではイタリック体である。

ルロイ・F・トルートナー、邦訳論文、22ページ。

- (6) 山田英世「デューイにおける人間存在の形而上学」『日本デューイ学会紀要』、第14号、1973年、2-9ページ。

甲斐進一「デューイ哲学におけるエグジステンス (existence) の問題（特に宗教論について）」『日本デューイ学会紀要』、第14号、1973年、10-17ページ。

峰島旭雄「デューイ哲学におけるエグジステンスの問題（特に実存主義との対比において）」『日本デューイ学会紀要』、第14号 1973年、18-23ページ。

- (7) 山田英世『J. デューイ』（清水書院、1966年）。

山田英世『明治プラグマティズムとジョン＝デューイ』（教育出版センター、1983年）。

- (8) 山田英世、前掲論文、2-3ページ。

- (9) 同論文、3ページ。

- (10) 同論文、4ページ。

- (11) 同論文、4ページ。

- (12) 同論文、4ページ。

- (13) 同論文、5ページ。

- (14) 同論文、5ページ。

- (15) 同論文、5-6ページ。

- (16) 同論文、6ページ。

- (17) 同論文、6ページ。傍点は、原文通りである。

- (18) 同論文、7ページ。

- (19) 同論文、6ページ。傍点は、原文通りである。

- (20) 同論文、7ページ。

- (21) 同論文、7ページ。

- (22) 同論文、8ページ。傍点は、原文通りである。

- (23) 甲斐進一、前掲論文、10ページ。

- (24) 同論文、10ページ。

- (25) 同論文、10ページ。

- (26) 同論文、10ページ。

- (27) 同論文、10ページ。

- (28) 同論文、11ページ。

- (29) 同論文、11ページ。

- (30) 同論文、11ページ。

- (31) 同論文、11ページ。

- (32) 同論文、12ページ。

- (33) 同論文、13ページ。

- (34) 同論文、15ページ。

- (35) 同論文、14ページ。
- (36) 同論文、16ページ。
- (37) 甲斐進一「経験主義哲学ーデューイを中心としてー」〔田浦武雄編著『教育の現象学』（福村出版、1975年）〕、87-98ページ。
- (38) 甲斐進一「デューイ哲学におけるエグジステンス（existence）の問題（特に宗教論について）」、15-16ページ。
- (39) 峰島旭雄、前掲論文、18-23ページ。
- (40) 同論文、18ページ。
- (41) 同論文、19ページ。
- (42) 同論文、19ページ。
- (43) 同論文、19ページ。
- (44) 同論文、19ページ。
- (45) 同論文、20ページ。
- (46) 同論文、20ページ。
- (47) 同論文、20ページ。
- (48) 同論文、20ページ。
- (49) 同論文、20ページ。
- (50) 同論文、20ページ。
- (51) 同論文、20ページ。傍点は、原文通りである。
- (52) 同論文、21ページ。
- (53) 同論文、21ページ。
- (54) 同論文、21ページ。
- (55) 同論文、21ページ。傍点は、原文通りである。
- (56) 同論文、21ページ。
- (57) 同論文、21ページ。
- (58) 同論文、21ページ。
- (59) 同論文、21ページ。
- (60) 同論文、22ページ。傍点は、原文通りである。
- (61) 同論文、22ページ。
- (62) 同論文、22-23ページ。
- (63) 山田英世、前掲論文、3 ページ。
- (64) 同論文、3 ページ。
- (65) この研究成果の一端は、論文「デューイにおける現象学的要素」（『日本デューイ学会紀要』、第33号、1992年所収）に発表してあるので、参照願いたい。